HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	The epidemiological studies of the association between life satisfaction and health among older adults [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	篠原, 尚子
Citation	北海道大学. 博士(医学) 甲第15896号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92411
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Note	配架番号：2830
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	SHINOHARA_Naoko_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　　博士（医　学）　　氏 名　篠原　尚子

	主査	准教授	倉島　庸
審査担当者	副査	教授	朝倉　聡
	副査	准教授	横田　勲

学 位 論 文 題 名

The epidemiological studies of the association between life satisfaction and health among older adults

（地域在住高齢者における生活満足度と健康に関する疫学研究）

本研究は、地域在住高齢者の生活満足度と健康について検討したものであり、学位申請者はその内容を第一章および第二章に分けて発表した。第一章では、高齢者の生活満足度と健康の関連について、文献のナラティブレビューを行った。その結果、生活満足度は死亡、認知機能、健康状態、活動制限との関連を認めるという知見を得た。第二章では、高齢者を対象として性差による生活満足度と身体機能低下との相関の経時的変化について、年齢別の前向きコホート研究によって検討した。女性では生活満足度が高い群は最も低い群に比べ身体機能低下のリスクの低下がみられたが、ベースラインから遠ざかると生活満足度の影響は弱くなった。男性では生活満足度と身体機能低下との間に相関を認めなかった。以上より、生活満足度が高いことは地域在住高齢者の健康に保護的にはたらく可能性が示された。

学位論文審査にあたり、初めに副査である横田准教授より「統計解析において軽症の報告がなく初回から重症であった対象者のデータの取り扱い」についての質問があった。申請者は「軽症として分類せず、重症として解析を行った」と回答した。その点について横田准教授から、重症なイベント発生について軽傷アウトカムの解析にて対処していないのは問題であるため、death / severe or death / mild, severe or death の３解析のみの結果を示して考察すべきであるというコメントがあった。さらに結果がポジティブでなくても，生活満足度の下位尺度を用いた解析や考察を盛り込むよう指示があった。申請者は学位論文に対して必要な修正と加筆をすると回答した。次に副査の朝倉教授より「生活満足度は性差や国，地域によって異なるか」という質問があった。申請者は「今回の解析対象者では違いはみられないものの、日本や欧米では女性の生活満足度のほうが高い」と回答した。主査の倉島准教授からは「学位論文の前半部分の文献レビューで，よりプロトコールに従い包括的な検索方略を用いるスコーピングレビューを行わなかった理由について」の質問と、本研究では対象とするテーマに関連する既存研究のエビデンスと課題を整理するのであれば、スコーピングレビューを実施すべきであった、との指摘があった。申請者はスコーピングレビューについての理解が不足していたため、今後の研究に活かす予定であると回答した。さらに主査の倉島准教授から「本研究の重要なパラメーターである、生活満足度を問う質問

項目については、どの程度質問項目内容の妥当性についての議論がなされたのか」についての質問があった。申請者は、本研究開始時点ですでに質問内容は決定され、データ収集が行われていたため、質問内容決定には関与できていない事実を回答した。また、仮に自分が立案可能であればどのような質問が妥当であるのかについて、適切に持論を回答した。

申請者は主査、副査からの全ての質問に対して、一部考察に修正が必要な部分も認めたものの、真摯かつ適切に回答した。また、本研究で得られた研究成果の意義、今後の課題をよく理解した上で、研究展開の方向性を示すことができていた。審査員一同は、大学院課程における研鑽や取得単位なども合わせ、申請者が博士（医学）の学位を受けるに十分な資質を有するものと判定した。